

# ビジョンストーリー 【アプリ開発編】

僕は、山脇健太12歳、都内の小学校に通う小学6年生。  
お父さん、お母さんと、弟の4人家族だ。

僕は、よくみんなから変わっている子と言われる。  
なぜなら、僕が理解できないことをみんなは理解できて、  
みんなが理解できないことを僕が理解できるからだと思う。

例えば、僕が小学校3年生の時、  
クラスの係で花壇の水やりが僕の仕事になったんだけど、  
僕は晴れの日も、雨の日も、台風の日も、毎日欠かさず水やりをしていたら、  
それがみんなはおかしいって言うんだ。でも、僕からしてみると、「花壇の水やりは毎日やりましょう」って書いてあるから、  
おかしいのはみんなの方だと思うんだけどね。

それから、ある時、クラスの友達から「手を貸してほしい」と言われた時、僕は「手は貸せないよ」と言ったんだ。友達は  
僕の返事にすごく驚いた様子で、すごくがっかりしていたんだ。後でわかったことなんだけど、手を貸してほしいというの  
は、どうやら僕に手伝ってほしいということだったらしい。お父さんやお母さんが悲しむから言えないけど、こんな僕だから、  
クラスやみんなの中に僕の居場所はなくって、それを考えるとすごく悲しくなる時があるんだ。

そんな僕が一番ホッとできるのは、電車の本や時刻表を見ている時だ。僕は小さい頃から電車が大好きで、お父さんとお母さんの話では、近所に買い物と一緒にいたりすると、その途中にある線路ですずっと電車を見てしまっ、「もうお買い物に行こう」とお父さんとお母さんがどんなに言っても、そこから動かなくなってしまうと大変だったそうだ。だから、お父さんとお母さんが考えて、僕のために電車の本をたくさん買ってくれたんだ。僕はみんなから変わっている子って言われてるし、他のみんなと仲良くすることがどうしていいかわからなくて難しいから、電車の本や時刻表を見ていると、この電車の本や時刻表の中が僕の居場所なんだって思えるんだ。



電車好きな僕の得意なことは、同じ経路でも何通りかの乗換路線を言えること。具体的には、例えば、お母さんの友達が新宿駅から川崎駅まで帰るとするよね。そうすると、僕の頭の中には3通りの乗換路線が浮かぶんだ。1つ目は、最短時間で帰れるルート。2つ目は、駅の中など移動が短くて楽なルート。3つ目は、珍しい電車が見れるルート。お父さんは、この3つ目のルートがわかる僕をすごくほめてくれるんだ。誰もが思い浮かぶことではないんだって。でも、電車の本と時刻表が大好きな僕としては、珍しい電車が見れるルートはすごく大切に、僕にとってはどんなに遠回りをしてでも見たい、とても重要なことなんだけどね。

ある時、お母さんが知り合った人の紹介で、僕みたいな電車大好きな子や大人が集まるサークルに連れて行ってくれたんだ。お母さんは、僕のために、いろんな人達の話聞いて、このサークルをみつけてきてくれたらしい。サークルの代表の大里さんは、僕が行くと、僕の電車話をずっとずっと聞いてくれたんだ。クラスの友達や学校の先生は、僕が話していると嫌な顔をするのに。大里さんは僕の気持ちがわかるみたいだ。

大里さんと話していた時、さっきの3通りの路線の話したら、大里さんがすごく身を乗り出して「面白い！」って言ったんだ。そして、大里さんはしばらく何か考えごとをして、誰かに電話をかけたんだ。「もしも、竹ノ内ってたしかアプリ開発してたよな？すごく面白いことがあるんだけど、今度話を聞いてもらえないかな？」僕にはよくわからないけれど、僕の話が何か関係しているらしい。そのあと、大里さんがお母さんと話をして、来週もこのサークルに来ることになったんだ。

2回目のサークルに来た時、大里さんが昔一緒にお仕事をしていた竹ノ内さんも来ていたんだ。僕に詳しく3通りの路線の話をしてほしいと言って、特に、珍しい電車が見れるルートについては、何やらいっぱいメモを取っていたんだ。僕が話し終わると、大里さんと竹ノ内さんが僕にこう言ったんだ。「健太君の今の話は、誰も思いつかなかった、新しい世界を作るきっかけになるかもしれない。」僕はよくわからなくて、新しい世界って何だろうと思っていると、竹ノ内さんがスマートフォンを見せながら、電車の路線乗換案内検索アプリを見せながらこう言ったんだ。「健太君が教えてくれる3通りの路線の内、1つ目、2つ目はこうやって出てくるよね？でも、3つ目は出てこない。だから、この3つ目が出てくるようなアプリを作ったら、すごく面白くないかな？」

竹ノ内さんが言うには、僕みたいな電車好きな人はいっぱいいて、まず、その人達がこんなアプリがあったらすごく喜ぶだろうって。でも、その喜びは、実は、社会の人にとっても楽しいと思えるものになったりして、楽しさや喜びが広がってつながっていくんだって。僕は初めて、僕の大好きなことをわかってくれる人がいて、お父さんでもない、お母さんでもない、他人に認められたと感じてすごく嬉しくなった。もっと言うと、クラスみんなに自慢したいって思った。

嬉しそうにしている僕を見て一緒に来ていたお母さんも嬉しくなったのか、お母さんも意見を言ったんだ。「2番目のルートですけど、乗り換えが楽だとは今のアプリでは出てきますが、どこにエレベーターやエスカレーターがあって、何両目で降りるとエレベーターやエスカレーターに乗りやすいっていうのがわかると、お年寄りや車いすの人は助かると思うんですけど、いかがでしょうか？」

さすが、僕のお母さんだ。お母さんのお母さん、僕のおばあちゃんは車いすに乗っていて、お母さんがおばあちゃんとお出かけする時、電車に乗るのがすごく大変だといつも言っていた。

僕のことをきっかけでおばあちゃんが困らないで済むなら、そんな嬉しいことはないと思った。

それから、僕たちは、僕と大里さん、竹ノ内さん、竹ノ内さんの会社の人達で「健太くんプロジェクト」と名前を付けて、チームを作って、アプリを開発したんだ。



アプリができるまで僕は、もう誰も僕のことにはわかってくれないとあきらめていたんだ。どうせ僕は変わっているし、僕のこと、周りのことも、理解なんてできっこないって、ずっと思っていたんだ。でも、この路線乗換案内検索アプリを開発したことで、こんな僕でも役に立てることがあるんだと、すごく自信が持てたんだ。そして、電車の本や時刻表の中じゃない、大里さんや竹ノ内さんがいるこの社会に、僕の居場所をみつけることができたんだ。今僕は、将来、鉄道会社に勤めて、もっともっと電車を好きになって、もっともっと面白いことをみつけないといけないよ。